

1981 年はんがカレンダー

# 「 生 きて いる 森 林 」



二又地区は六ヶ所村の内陸部で、吹越烏帽子岳の山麓に位置しています。山の森林からとれる木材は、炭焼きや鉄道、建物の材料として使われていました。谷には老部川や二又川が流れ、この地の豊かな森林と河川が人々の生活を支えてきました。

この版画カレンダー「生きている森林」は、昭和 56 年に六ヶ所村立二又小学校全校児童 32 名が、先生方と一緒に作り上げたものです。子供たちは、森林見学や生き物調べ、炭焼き体験などの郷土学習を行い、そのまとめとして、このカレンダーを作りました。

このカレンダーには、森に生きていた動物たちの感情や森とかがかわる大人たちの仕事ぶりが描かれています。どれも、子供たちが二又の森林を見て、聞いて、感じたことです。当時の二又の子供たちの話に耳を傾けてみませんか。



## 1月 大すきな森や森林

一年 川畑 やす子 はたけ山 たもつ  
僕たちは、森にいきました。僕は、かぶと虫に「こい、こい。」と叫びました。かぶと虫は、「いやだよー。」と、つめをかけて、木の上へのぼっていきました。わたしは、バツタに、「あそびましょ。」と叫ぶと、太いうしろ足でポンと飛んでにげていきました。僕たちは、虫とあそびたいのになあ。



## 2月 森や林にすむどうぶつ

一年 あきと さおり あきと ひろぐ  
二又の森や林には、りす、うさぎ、たぬき、きつね、くま、いたち、山ねずみ、へび、とかげ、うぐいす、きつつき、かっこう、など、たくさんの動物が住んでいます。ずうっと山奥にいくと、かもしかや、むささびもいるそうです。  
冬は寒いから、りすたちが死ななくて、元気で生きているといいなあ。春になって、また森や林にあそびにくるといいなあ。



## 3月 春をまつちび

二年 秋戸 洋子 中嶋 まなぶ 畠山 けん一  
「わっ、まぶしいよう。」生まれてはじめて、ちびは、穴の外を見て、びっくりしました。「おかあさん、あれ、なあに。」「あれは、雪というものなんだよ。」「下できらきらしているもの、なあに。」「あれは、つもった雪なんだよ。」「あの上であそびたいなあ。」「だめだよ。手足が冷たくなって、こごえてしまうよ。まだ、寝てなさい。」「穴の中で生まれた、くまの子ちびは、春を待つて、寝ることにしました。



## 4月 こわい山火じ

二年 秋戸 みちる 川畑 のりひと 中嶋 まり子  
「山火事だあ。山火事だあ。」と、うぐいすは森じゅうにさげびました。昼寝をしていた動物たちは「え、ほんとか。」とがばっと飛び起きました。火は、パチパチはねながら、ごうごう燃えています。動物たちは、けむりにまかれながら、やっとのことで、ほかの森ににげこみました。「人間たちが、たばこのすいがらをすっかり消さないでいったのかなあ。」と、森の動物たちは言っていました。



## 5月 「ヤッホー」と、森に集まる僕達

三年 秋戸 大仁 川畑 優則 堀内 和人  
山の雪が消えて雪どけの水がどんどん流れるころになると、僕達は、アマゾンのようなジャングルをさがして山に出かけるのです。「アーアーッアー。」だれかがジャングル発見の合図をすると、みんな森の中にとびこみ、ターザンごっこをはじめます。僕達の大好きな、この森も、この頃東北一をほこる牧草地帯に変わり、まわりの山がどんどん少なくなってきました。僕達は、やっぱり山にかこまれた僕達の村が大好きです。



## 6月 山桜(かば)の皮を取るおじさん達

三年 秋戸 千春 葛西 尚人 川畑 昭彦  
田植えが終わる頃になると、秋田県から、山桜の皮をはぐ人たちがやってきます。老部川の上流は、昔からのひばの原生林で、風のあたらない下流の山里一帯には、山桜の木がたくさん生えていたそうです。おじさん達は、すべり止めのついたくつをはき、山用の大きなナイフで桜の木の皮をはいでいました。「だいじょうぶだよ。十年たつと、もようの美しい、やわらかくてつやのある新しい皮ができてくるんだよ。」と教えてくれました。おじさん達は、すずり箱やテーブル、お茶びつなど、日本の人達が喜ぶ、りっぱな工芸品を作っているそうです。



## 7月 昔から利用されていた柏の木

四年 川畑 由美子 瀬川 進一 附田 角栄 中嶋 美也子  
昔から村の人達は、柏の木を「かしらぎの木」とよんで、いろいろ利用していたそうです。二又の人達は炭を焼いたり家で燃やす「まき」を切ったりしていたそうです。又、柏の木の皮は、強い「しぶ」をもっているので漁師達はこの皮で網を煮てしぶをかけたそうです。今、私達は柏の葉をつんでいるところです。古い葉っぱに守られて大きくなった緑の葉を東京のお菓子工場まで売ってやるのです。お盆になると今でも私達はこの葉っぱにごちそうをのせてお墓参りをしています。

## 8月 僕達のたからの森

四年 秋戸 学大 瀬川 孝司 中嶋 由紀子  
学校のすぐ前にある森を僕達は「たからの森」と呼んでいつも遊びにいきます。大空に向かってのびている大木「しなの木」は、僕達の校歌にもなっています。雪がとけると、一番先に咲く「きくざいきちげ」は、白い、かわいい花です。昔の武士達が毒の矢の先に使ったという「とりかぶと」も生えています。川には、黒い毛をかぶった大きな「モクスガニ」や「イワナ」等もでてきます。夏になるとよくこの森に行き、お弁当を食べたり、仲間でお勉強したりする、僕達の楽しい森です。



## 9月 木を切る仕事と運ぶ仕事

五年 中嶋 ルリ子 六年 中嶋 和行

昔、二又の山では、ヒバやブナなどいろいろの種類の木が生えていました。木は、木炭の原料や鉄道の枕木などにするために切り出したそうです。木炭用の木を運ぶには、ヨツソリを使い、枕木などの原木は、馬を使って運びました。馬にも人にも、とてもつらい仕事だったそうです。このような仕事の中で、はもんで手を切ったり、木の下になったりして、けがをする人も多くてとてもあぶなかったそうです。二又の人は、とてもりっぱだなあ、と思いました。



## 10月 森林鉄道

六年 秋戸 淳一 林 弘枝

二又森林鉄道は、昭和の初めに作られました。ジーゼル機関車に引かれたトロツコが、老部川沿いに、尾駁から吹越えぼしの奥まで通るようになってからは、木を運ぶ仕事は馬や人から森林鉄道に代わりました。そして何倍もの木を運べるようになったのです。けれども、森林鉄道も木をトロツコに積むときに、木がくずれてけがをしたり、雨の日にはトロツコがスリップしたりして危険だったそうです。森林鉄道が通るようになって仕事も楽になり、今までよりもたくさん働けるようになりました。しかし、この森林鉄道も、トラックがさかんに使われるようになったので昭和35年になくなってしまいました。



## 11月 炭焼きの仕事

五年 工藤 恒之 田嶋 里夏子 六年 秋戸 則幸

炭焼きは、昔から二又にとって、とても大事な仕事でした。初めのころは、「ホリガマ」という方法で、がけに穴を掘り、その中に木を入れて火をつけ、「白炭」という炭を作ったといいます。でも、大正4年、5年に、三戸から先生がきて、「ドガマ」というやり方を教えてくれました。これが、今の炭焼きの方法です。ドガマでやると、今までの5倍もの炭が焼けるようになりました。二又では良質の炭がとれるので有名だったそうです。



## 12月 森林と私達

五年 秋戸 守 六年 秋戸 幸子

森林は昔から私達の暮らしをよくしてくれました。家の材料や燃料として使われるだけでなく、自然の災害から私達を守ってくれます。遠足や山菜とりの楽しさを与えてくれています。

私達の学校では、二又森林子ども隊を作って、森林を守るポスターをはったり、山火事に注意したりするようにしています。これは、みんなで森林を大切にしていきたいと思うからです。



1990 年はんがカレンダー

# 「炭焼きのしごと」



二又地区で行われていた産業として、炭づくりがあげられます。明治の終わりごろから昭和の初めごろまで、行われていました。二又の炭は良質で有名だったそうです。しかし、燃料の主体が石油に変わったことにより、炭焼きをする人々は数を減らしていきました。

1980年度の二又小学校の児童たちは、炭焼きをした先人たちの生き様を後世に伝えようと、炭焼きの復活をさせました。実際に、炭焼きに従事した古老中嶋久太郎氏の指導のもとに、窯をよみがえらせました。このカレンダーはその一環として、中嶋氏より聞き取りをして作られたものです。一年間を通じて行われる炭焼きが、版画を通して生き生きと表現されています。また、それぞれの説明は、二又地区の炭焼きをより具体的に知るうえでとても貴重な資料でもあります。

このカレンダーから、二又地区で生きた人々の力強さがよくわかります。



## 1月 木切り

六年 中嶋 牧子

すみをやく木を切りました。一番いい木は、ならやかしわの木だそうです。お父さんたちが朝早くから、チェーンソーやのこぎり、なたを使って切りました。昔はたくさん木があったけれどもかいはつが進み、すみをやくきがなくなってきました。いまはすみをやいているひとはだれもいません。



## 2月 木の山だし

三年 秋戸 かな子

切った木は、車の通る大きい道路まで運ばなければなりません。ばらがあったり、ささがあったり、坂道など思うようにいきません。木の中心を考えてかつぐと、とても楽に運ぶことができます。

昔は、すみやきがまのところまで、そりなどについで人が運んだそうです。

木運びをして、昔の人のくろうがよくわかりました。



## 3月 原木切り

五年 秋戸 三紀

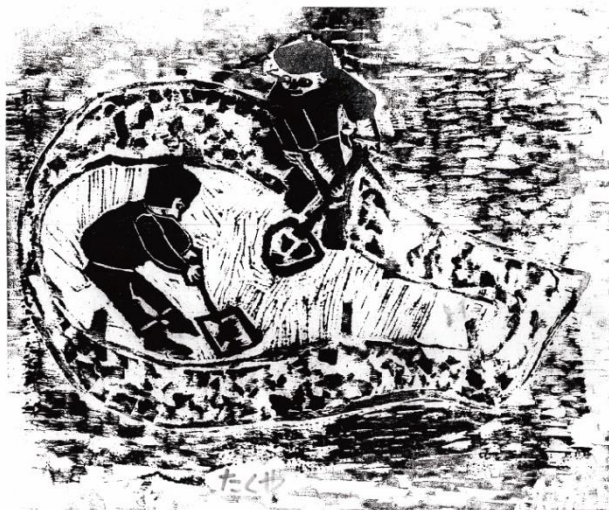
すみやきがまに入れるため、七十五センチの同じ長さに切りました。正しくはかつて切ったつもりでしたが、まちまちだったのでそろえるために切りなおしたのもありました。はじめてのこを切ったのでしょうずに切れませんでした。二本目からは、あまりちからを使わないでらくに切れるようになりました。太い木は、大人の方がまさかりで割ってくれました。

## 4月 かまほり

六年 濱田 英邦

だいじなのはこれからです、風のむき、雨水の流れなどを考えてかまほりです。

はじめ、かまの設計をしました。木の棒を立て、きちとはかって、石灰と、ひもでかまの形を作りました。その後でつるはし、スコップでかまをほりました。深さは八〇センチです。うめ立て地のため中から針金や石ころが出てきて大変でした。ズボンがよごれました。汗を流したあとのジュースがとてもおいしかったです。





## 5月 ねん土かため

六年 中嶋 正孝

枝で形を整えた上に、わらをかさね、その上に粘土に粘土をかためて行きます。いい粘土は、かまに火を入れても割れたりしないそうです。見分け方は、粘土を手でまるめ、ストーブの上でやいてみて、ぼろぼろになったり、割れないのがいいそうです。

木のつちでていねにかためていきます。

昔やった人たちは、ここが一番だいじだと、しんけんにかためていきました。



## 6月 木ならべ

五年 中嶋 拓也

ほったかまに、七十センチに切った原木を並べていきます。たてに、すきまのないように、つちでうちつけたりします。

できあがったすみは、生な原木の四分の一位の重さになるそうです。

並べた木の上に、枝などを小さく切ったものをならべて、形を丸くなるようにととのえて行きます。



## 7月 すみすごあみ

五年 秋戸 希

すみを入れる、すみすごあみをふ人会のおばさんたちが教えてくれました。

材料は、かやとなわです。ぼくたちは全員でなわなりをしました。はじめはじょうずにできませんでしたが、三十分ぐらいしたらじょうずにできるようになりました。

昔はなわなりは、おんなのひとや五、六年生の仕事だったそうです。



## 8月 かやかりとかやはこび

五年 秋戸 智美

すみやき小屋につかうやねをかって運びました。かやかりは、P.T.Aのお父さんたちがやってくれました。わたしたちは運びました。

かやはすみやきがまの近くにたくさんあったので楽でした。

“トタンのほうが良いのでは”と思いましたが、かやは雨などを大変よく流してくれるので一番いいそうです。



## 9月 こやがけ

四年 秋戸 昇

雨や雪からすみやきがまを守るために、こやがけをしました。すぎのほけをくみあわせて、ほねぐみをつりました。くぎは一本もつかいません。それにかやをのせ、なわでおさえて行きます。

七十才もすぎたおじいちゃんたちが二メートルもある高いところで平気で仕事をしています。

びっくりしました。



## 10月 かまだし

よしひろ

火入れをしてから七日目です。

かまの口をしっかりとめ、火をけしてしまったが、まちにまったしゅんかんです。おじいさんが、入り口のふたとりました。真黒にやけたすみがはっきりとみえました。みんなではくしゅをしてもりあがりました。一人ずつ中へ入ってすみをだしました。かまの中はまだあつくて、あせがでるようでした。



## 11月 木炭切り

二年 千葉 なおみ

かまから出したすみは、三十センチの長さに切ってすみすごや、ダンボールのなかに入れました。焼く前に木を切ったよりもかんたんにきることができました。

みんなのかおは、すみのこなでまっくろです。新聞社の人やテレビのカメラマンがきて、うつしていました。夕方のテレビにもはいました。



## 12月 すみすごいれ

二年 川畑 かおり

すみすごにいれるのは、おばあさんたちが教えてくれました。

一ぴょうのおもさは二十キロありました。すみすごに八ひょういれ、のこりはダンボールばこにいれました。十三ひょうぐらいとれました。

あとで、手伝いをしてくれたひとたちにわけてやりました。

きっとよろこんでつかわれると思います。